

佳作

天国へのお見送り

宮城県 聖ドミニコ学院小学校四年 八幡凜

アサおばあちゃんは、私の父のおばあさんで、私のひいおばあさんです。昨年、百歳になり、盛岡市で表彰されました。アサおばあちゃんの家は、私の家から遠いので、たまにしか会えません。でも、私が会いに行くと、いつも笑顔で迎えてくれて、ギュッとだきしめてくれます。私は、やさしいアサおばあちゃんのが大好きです。

四年生の夏休み、旅行から帰る日に、突然父に電話がかかってきました。私が母に、

「何かあったの？」

と聞くと、母が、

「アサおばあちゃんがゆっくり眠って、天国に行ったんだって。」

と言いました。私は、一瞬、誰のことを言っているのか分からず、何も言えませんでした。その後、電

話を終えた父が戻ってきて、私にくわしく説明してくれました。アサおばあちゃんは、ここ一か月の間、ほとんど眠った状態だったそうです。だから、アサおばあちゃんの近くに住んでいる家族は、とても心配していたそうです。私は何も知らなくて、急にその話を聞いたので、びっくりして泣いてしまいました。

次の日、私はお通夜に参加しました。母は、「こわかったら、子どもは参加しなくてもいいよ。」と言っていました。アサおばあちゃんに会えるのは最後なので、私は、「絶対に参加したい」と思いました。アサおばあちゃんは、母が言った通り、ゆっくり眠っていました。その顔は、百歳とは思えないくらいきれいでした。

おしよさんがお経を唱えているとき、みんな悲しそうに合掌していました。祖父は、お別れのあいさつをするとき、泣きそうでした。アサおばあちゃんが亡くなる前の一か月間、祖父は、毎日顔を見に行っていたそうです。父や母も泣くのをごまかしているようでした。

「大人は、なぜ、泣くのをごまかすのだろうか。」私には不思議でたまりません。私は、涙があふれて

止められませんでした。お通夜に参加するのも、お焼香するのも初めてでした。お香のけむりがアサおばあちゃんに届くように、心をこめました。

お葬式の日、私は一番小さなひ孫として、アサおばあちゃんへの手紙を読みました。アサおばあちゃんの手がいつも温かかったこと、やさしかったこと、大好きだったことなどを伝えました。泣きそうだったけれど、大きな声で読みました。きっと、アサおばあちゃんも聞いてくれたと思います。

アサおばあちゃんに会えなくなるのはさみしいけれど、天国へのお見送りがきちんとできた気がしました。私は、お通夜とお葬式に参加して良かったです。

やさしかったアサおばあちゃん、大好きだよ。これからは、天国から見守っていてくださいいね。